

## 《現象文》のこと

松本泰文

三尾砂『国語法文章論』にみえる、現象文・判断文などの区別は、用語からしていかにも、文の意味に内容面を重視しているとおもえるし、三上章もそのような指摘をしているが、三尾は意味上の特徴だけにたよって、これらをとりにだしているわけではない。三尾は、現象文・判断文ほかの文の区別について、へまず形の上からちがつていること、つぎに精神機能のそれぞれちがつた性質をあらわしていることの、二つの標準から見て行きたい。(八二ページ)と、外形表現面と内容面の双方をかんがえあわせながら、それぞれの文を特徴づけようとする。そして、実際にも、三尾は現象文の説明を「形の上の特徴」(八二)のとりだしからはじめている。

現象文の外形上の特徴について、三尾はつぎのような点を指摘する。主語は「ガ」のかたちであらわれる。述語は動詞で、かたちはシテイル、シタが中心である。スルはすくない(がある)。主語が「ハ」になつたり、述語がシテイルノダになつたりすると、現象文でなく判断文になる、など。

三尾は現象文について、外形上の特徴としてあらわれたことが、内容面のどのような事実と呼応するかにもおもいをめぐらす。たとえば、「現象文は述部が動詞であるという事実によつても明かなとおり、何時か何所かにある、存続し、あるいは変化し、消失しつづつある現象の表現である。」(八四)とはじめた箇所では、「雨がふつ

てる」は、「今」「この辺に」という時間空間の制約を持っている(八四)ことをとく。こうして現象文の、さきにみた表現面の特徴を「時的制約」(八四)という内容面の事実へとつなげていく。

「雨がふつてる」ほかの三尾のあげる現象文の述語は、「のだ」でもないし、「うだ」「よ」もついでない。これは現象文ではなくて、「雨だ」という文の説明のところだが、「きき手がいてもいなくても、ひとりご的にさげぶ場合」(五二)として、「へ：はんだんをあらわしたのでもなく、「雨がふつてきたぞ！」といつて人に注意するのでもない、見たとおり、見たと同じに感じたままを、そのまま「雨がふつてきた」というほどの意味を……(五二)というところ。未展開文「雨だ」が現象文へと展開したばあい、この説明があてはまるだろう。

『国語法文章論』の全体としても、現象文に関して、三尾はデテイルのすべてにわたって説明しているわけではないし、三尾にとつて自明のことも、わざわざかいたりしてはいないようである。そこで、あげてある例文などからも、三尾のかんがえをうかがっていく必要がある。三尾の現象文に、「雨がふつてる」、「からすが飛んでる」などの自然現象文、「本がある」、「鉛筆がある」などの存在文はあがつているが、ハナシテの生理・心理現象をあらわす例文がみられない点からみると、仁田義雄「日本語文の表現類型」(『英語と日本語』一九七九、くろしお出版のいう「人称制限」へも、目がおよんでいたのかもしれない)。

この種のことでもふくめて、三尾の現象文の内容面をかたちづくる特徴をならべてみる。現象文であらわされるデキゴトは、ハナシテのソトに第三者として存在する。そのデキゴトは、視覚をはじめハナシテの感覚にうつしだされ、感覚でとらえられる。そのさ

い、デキゴトは時所的制約 localization をうけてあらわれるから、具体化、個別化された特定のデキゴトである。つまり、現象文は、ハナシテによつてとらえられた、ポテンシャルでなくアクチュアルなデキゴトをあらわす。また、判断文とちがつて、現象文にはハナシテをとるテーマ主語がたえず、文全体がレーマ（新情報）仁田「日本語文：」になる。

現象文のモダリティーや動詞のムードをかんがえると、現象文は、ハナシテのとらえたアクチュアルなデキゴトを、ハナシテの主張としてでなく、また、想像や仮定としてでもなくあらわしている。そのことから、現象文にかかわるモダリティーとムードは、のべた〈文とそれをなう断定法〉 indicative mood の中心部分に位置づけられる。

時所的制約のうち時間の制約は、現象文のテンスIIアスペクトにあらわれる。三尾が現象文の述語に動詞シテル形をあげるのは、ハナシテのとらえた現在II発話時のデキゴトがアクチュアルだからである。シタ形もあげるのは、発話時以前の過去のデキゴトも、ハナシテのとらえたものであれば、やはりアクチュアルといえるからである。一方、未来のことは、時所的制約ほかをもたつて特定化はできる。「あしたの五時にともちが東京駅につく。」のように。しかし、それがどれほどたしかだとしても、いまのところハナシテにとつてアクチュアルではない。こうしてスル形のあつかいは、シテル形・シタ形とちがつてくる。

スル形がアクチュアルな現在をさす例は、『国語法文章論』にはあがつていないが、『話しことばの文法』で、スル形が「現在をあらわすものとしてつかわれる場合」（八二二）にふれて、「やあ、およめさんが行く。」「やあ、ポチが走ってくる。」のように「眼前に進

行中のことを動的に表現する場合」（八四）をとりあげている。スル形のこの種の用法への三尾の注目は、これまでみてきた、現象文の内容面に対する三尾のめくばりと無関係ではないだろう。

また、三尾が、時所的制約とのべて、時間の制約だけでなく空間の制約にもふれていることは、言語外のデキゴトとの関連で、現象文のアクチュアルな性格を、内容ゆたかにとらえようとしていることをものがたる。できれば、存在文、自然現象文などの例で、ありか空間をしめす二がはいっていれば、具体的だったとおもう。

述語からみて、三尾は現象文を動詞文の範囲にとどめている。しかし、現象文の表現面、内容面に関する三尾のとらえかたからいえば、形容詞述語文でも、主語が「ガ」であらわれ、ハナシテのとらえた現在のアクチュアルなメノマエの状態をあらわす、「かぜがつよい。」「なみがたかい。」のような文を現象文にいれないでおく必要はないだろう。これらに、さらに名詞述語文にみられる現象文をふくめて、仁田「日本語のモダリティと人称」（一九九一）ひつじ書房）がとりあげている。

三尾の分類では現象文でなく判断文にまわる文のなかに、鈴木重幸「現代日本語の動詞のテンス」（『言語の研究』一九七七）むぎ書房）にある、「きょうのお湯はばかにあついね。」「きょうはよくだつこしますね。」のような、高橋太郎「現代日本語動詞のアスペクトとテンス」（一九八四）国立国語研究所）で、「特定のできごとをさしめして、質的な属性としてのべるばあい」とする文がある。文末の「くね」の問題はにおいて、この種の文は、ハナシテがとらえたアクチュアルなメノマエのデキゴトをとつて判断をあらわしている点で、判断文によくある超時的なタイプとも、時所的制約をもつがそれがアクチュアルでないタイプなどとも、あきらかにちが

う。これらからみると、判断文のなかにも、現象性からはなれきれなくて、現象文にみとめられる特徴をひきずっているものがあることとなる。

判断文の例に三尾があげている形容詞文「この花は美しい。」(九〇)も、「バラはうつくしい。」とくらべたばあいには、「この」という指示によってアクチュアルなメノマエ性をとりだせる点で、「両者まったくおなじというわけではない。また、名詞文のばあい、高橋太郎『日本語の文法』(講義テキスト 一九九五)にいう、特徴をあらわす文「かれはチンドン屋だ。」と同一性をさだめる文「あれはチンドン屋だ。」も、三尾はともに判断文におさめることになっているが、ここでも後者にアクチュアルな側面があらからかである。

現象文をめぐってではないが、未展開文「火事だ。」について、さきにふれた現象文に展開するなごれを、判断文に展開するなごれから区別してとりだしたことは、三尾の創見として、金田一春彦『日本語』下でたたえられている。同様に、判断文に関しても、現象文とのからみや各種の面から区分していくことは、三尾の業績を発展的にうけつぐことになるとおもわれる。そのさい、みぎにとりあげた、アクチュアルかどうかということも、さらに区分するうえでひとつの軸になるのではないだろうか。

琉球方言には、ハナシテのメノマエにある特定のデキゴトをハナシテがその場でとらえたとき、それをさししめすのにもちいられる動詞の語形がある。この語形は、デキゴトのアクチュアル性をあらわすことを中心的な用法としているようで、その点では三尾のいう判断文も、アクチュアル性をそなえていれば、動詞述語はその語形であらわれてさしつかえない。この種の現象を積極的にとりあげるにも、三尾のさしだす現象文や判断文の区分は、無視できない重要

さをもっている。いまふれた琉球方言の事実に関しては、別稿でとりあげたい。

(山梨大学教授)